

インド（インド）

インドは大航海時代にイギリスの植民地になった。第二次世界大戦後、マハトマ ガンジーなどの独立運動を経て 1947 年に独立する。その時、ヒンズー教徒の多い地域はインド、イスラム教徒の多いところはパキスタンとして独立。その後、パキスタンは東西に分裂し、東はバングラデッシュとなる。1948 年には仏教徒の多いセイロンが分離独立し、後にスリランカとなった。かつてのインドは 4 つの国家に分裂してしまう。

世界で最も人口が多く 14.5 億を超える（2024）。更に多くの民族、言語、宗教からなる。公用語はヒンズー語だが、1956 年以来、州の編成を言語別に行っていることもあり、主な言語だけで 15 を越え、憲法で認められている言語は 21 を数える。

インドの農村部では灌漑や機械化が遅れているため多くの労働者を必要としていることもあり、労働人口の 52% は農業である。人口が毎年 1,000 万～1,500 万人増加しているにもかかわらず、「緑の革命」実施により米の輸出国となり、小麦、大豆、綿花、乳、茶など世界的産地である。

近年、インドの製造業とサービス業が急成長を遂げている。中でも IT 産業は最たるものである。その裏には公用語のヒンズー語は国民の 41% しか話せないが、準公用語の英語が共通言語として広く使用されていたこと。国民の 80% が信仰するヒンズー教がカースト制と結びつき職業は世襲であったが、IT 産業というカースト制度にない職業の登場で幅広い人々から関心が集まったことなどが理由として考えられる。

インドはパキスタン、中国はじめ多くの国々と接していることもあり、領土紛争が絶えない。パキスタンとは独立直後からカシミールの帰属をめぐる紛争が起き、今なお継続しており、核兵器開発までエスカレートしてしまった。また、ネパールとブータンの間のシッキム州と、ブータンとミャンマーの間のアルナチャル プラデッシュ州で中国との国境争いがある。1962 年中国軍が国境を超えて攻めてきたこともあり、未解決のままである。

<ガンジス川> — 刷毛で撫でたような三角州（PC からコピー）



ガンジス川の源流はヒマラヤ山脈西端の氷河である。ヒンドスタン平原を東に流れ、多くの支流を集めて隣国のバングラデシュに入る。首都ダッカの西方でヒマラヤ山脈北面の水集め、アッサム地方を流れてくるブラマプトラ川と合流しベンガル湾に注いでいる。河口から200~300 km上流あたりから乱流し、広大なガンジスデルタをつくっている。

チェンナイ、旧マドラスからコルカタ、旧カルカッタに飛行機で来た時、林立する積乱雲の間から見えるベンガル湾は青く、インド亜大陸は茶褐色であった。ベンガル湾が濁り出し、濁りが層をなしはじめたと思ったら、ガンジス川の三角州が目に入ってきた。見える限り全てが三角州だった。資料によると河口から100 kmまでは三角州の成長過程だという。大小さまざまな河川が血管のようにきままに流れているのが望まれた。コルカタは、河口から140 kmもあるのに標高はたったの6 mである。三角州はまるで刷毛で撫でたように真っ平で、言葉を失いただ見入った。

民族と宗教

ひとくちにインドといっても、その広さは旧ソ連を除いた全ヨーロッパに等しい。そこには、言語や風習など全く違ういくつかの「国」があるといっても良い。インドの州は言語州といって、主要な言語の使用地域にそって州境が定められている。従って、西ベンガル州ではベンガル語、オリッサ州ではオリッサ語というように、たいてい1つの州は1つの言語である。

右：インドの紙幣(金額を15の言葉で標記、更に公用語のヒンズー語と準公用語の英語が加わる) PCからコピー



ところで、「民族」の意味を「ある一定の地域に住み、共通の言語を話し、共通の活様式をもち、ある程度の身体的特徴を共有する人間集団」をさすとすれば、インドの州は大雑把に言ってこの民族に当てはまる。従って、インドの1つの州は、ヨーロッパの1つの国家にも匹敵するといえる。

<インドの紙幣>

インドの旅で1、5、10、20ルピーの紙幣が何かと便利である。100や200ルピーの高額紙幣は敬遠される。使用頻度の高い小額紙幣は、例外なく汚れがひどく傷んでいる。破れたもの、セロテープで補修したもの、角のちぎれた紙幣は、一膳飯屋や露店ではかなりの確率で受け取り拒否にあう。両替所でも嫌われる。従って、両替時は金額確認と共に紙幣の点検を怠っては駄目である。釣銭を受け取る時は要注意で、紙幣点検のことを考え、なるべく釣銭の少ないようにすることである。また、日本と違いホッチキスの跡とボールペンによるメモが目立つ。紙幣が破けていなければ問題ないが、どうも気になった。

食糧自給を達成

首都ニューデリーから北西部に向かう国道1号線に緑の広大な平原が続く。「緑の革命」の中心地であるパンジャブ州とハリヤーナー州である。国道の両側は、家畜の通り道でもあり舗装はされていない。そして国道沿いにはユーカリ、バーニヤンの木々が生い茂り、その向こうにエンジンを唸

らせるトラクターが見え、用水路網が広がっていた。

「緑の革命」とは、従来の伝統作種の作物に比べて、2 倍近い高収量品種の導入と普及とによる農業の生産革命のことである。高収量品種は、インドの代表的な作物である米と小麦だけでなく、トウモロコシなど様々な作物においても開発され、農業の生産力は飛躍的に高まった。かつてインドは食料不足に悩まされ、大量の食料輸入や援助に頼ってきた。しかし、1980 年代半ばには、7 億人を越える人口を擁しながらも食糧自給を達成し、90 年代には旧ソ連へ食糧援助をするまでになった。これらは「緑の革命」によって実現されたものだが、同時に多くの新たな社会問題や環境問題も発生させている。

高収量品種の導入には、一定の条件が必要だ。伝統品種に比べて雑草との競争力が劣るので、除草剤や農薬を投入しなければならない。また、収量を増やすためには大量の化学肥料を投入する必要がある。さらに、高収量品種には灌漑と用水管理が不可欠である。これまで自然灌漑に頼っていた稲作を、農業用水路や地下からポンプで水を汲みだす灌漑施設を整えたものに変えなければならない。そのポンプを動かすためには電力も必要になる。

従って、この様な条件を満たすことの可能な地域とそうでない地域との間で地域間格差が生まれた。また、高収量品種を導入した大規模経営農家と零細農家との間でも格差が生じている。

＜インド料理の美味番付と国民食＞

インド北部の辺境地はチベット文化圏で、国境を巡って中国といざこざが絶えない地域である。宗教は仏教で殺生を嫌う。チベットを旅しているとき、生きるため止むに止まれず殺生する場合、ヤクのような大型動物の命も、小魚の命も同じと考える。チベット人が魚を食べない理由の一つだという。

49 年ぶりのインドだったが食糧事情は大きく変わっていた。かつて心を痛めた腹を空かせた子どもを見かけることはなかった。インド人のカロリー摂取量は、1 日 2,460 kcal（'02）で、日本人の平均を 1,800～2,200 kcal を越えている。シッキム州やアルナチャル プラデッシュ州タワンに来るインド人の観光客はみんな太っていた。貧しかった反動からか太っていることは豊かさ、健康の象徴とする風潮があると聞いた。

インド料理を一口で表現するとカレーとギー、粗製バターの多用を特徴としている。宗教上の理由からウシ、ブタを食べず、ヒツジ、ニワトリが主となる。米は飯、小麦はチャパティーやプーリーに調理され、主食の位置を占め、ダルと呼ばれる豆料理を伴うことが多い。

パンジャブ ヒマラヤに入る前、通訳としてシーク教徒のヘムシン氏を雇用した。彼によると、インド料理の美味番付は、上流家庭のインド料理を筆頭に、中流家庭のインド料理、中流レストランのインド料理と続き、一流レストランは最後だという。一流レストランの味はヨーロッパ的に加えて、値段だけが高く駄目だという。



インドの国民食ターリー

インドやネパールの一膳飯屋で最も人気があるが大皿料理を意味するターリー、ネパールではダルバートで、日本のラーメンに匹敵する国民食である。豆スープ（ダル）、飯（バート）、おかず（カレー味のタルカリ）、漬物（アチャール）がセットで大皿に盛られている。一膳飯屋、ダバに居合わせた客、ガイドもドライバーも即注文していた。

<カレー料理>

カレーと言えばインドを連想する。確かに、カレーとして伝わっている料理の発祥地はインドだが、カレーという食べものはインドに存在しない。インドのカレーは「香辛料やハーブを使った汁状の料理」を表す単語である。また、日本で普段使っているカレー粉も存在しない。現在、カレー粉と呼ばれているものはイギリスで作られた。カレーがイギリスに伝わった時点で、かなりの人気料理だったという。カレーを作るたびにスパイス調合をしなければならなかったため、カレーパウダーが発明された。クロス アンド ブラックウェル社、C&B が商品化したのがカレー粉の始まりである。カレー粉は、カルダモン、シナモン、グローブなど様々な香辛料を混合したもので、インドでも高価で、甘い香りのスパイスがベースになっている。

カレー料理の元になっている様々なスパイスの歴史をたどってみると、ヨーロッパ人が命がけの航海で探し求めた歴史がある。時には金、ゴールドと同じ値段で取引されたといわれている。また、スパイスは漢方薬でも知られている。従って、カレーは、見方によっては高価で、ロマンに満ちた、健康食で、贅沢極まりない食べものといえる。

【資料】日本で究極のカレーが誕生

新宿中村屋の創業者、相馬愛蔵は、インド独立運動でイギリス政府から迫害を受け、日本に亡命してきたラス ハリ ボースをかくまった。後に、愛蔵の長女と結婚したが、彼女は 29 歳で亡くなってしまう。妻を失ったボースは、故郷のインドを懐かしむようになる。そんな折、中村屋に喫茶創設の話が持ち上がった。当時の日本のカレーライスとは名ばかりのもので本場インドのものとは似ても似つかぬものだった。ボースは祖国インドに対する日本人の認識の誤り正すために純インド風カレーを日本に紹介したいとはじめたものといわれている。祖国への愛とプライドから生まれたものだった。純インドカレーを作るために究極の素材を用いた。米は江戸時代に大名が食べていた白目米を埼玉の農家から取り寄せ、肉は自営農場で飼育したシャモ、バターも卵も自営農場で生産した。普通のカレーが 10 銭だった当時 80 銭と高額だったが、1 日 200 食も売れる人気商品になったという。（ネットニュース「中村屋ボースと相馬俊子の恋と革命の味…」を参考）

【資料】カレーのお国柄

・インドのカレー

カレー発祥の地、インドではカレーのことを「スパイスを使った汁状の食べもの」と呼んでいる。また、我々が認識しているようなカレー粉というものは存在せず、ガラムマサラ、クローブ、シナモンといったスパイスを使いカレーを作っている。また、日本で主に食べられているとろみのあるカレーはなく、水気の多いカレーが主流。お米だけでなく、ナンと呼ばれる薄いパンにつけて食べるのも特徴。

・タイのカレー

タイではカレーのことを「ゲーン」と呼び、熱帯の気候の中、食をすすめる料理として一般的に食べら

れている。インドよりは数段辛く、酸味と甘味を持っているのが特徴。また、他国のカレーと違い、ナムプラーという調味料やココナッツミルク、タケノコなど多くの具や調味料を用いて、具たくさんのカレーが一般的に食べられている。

- スリランカのカレー

インドの南に位置するスリランカもカレー文化の発達した国。スリランカのカレーの特徴は、日本の鰹節のような「モルジブフィッシュ」が使われている点にある。また、長くて赤い米が使われており、アーユルヴェーダ^(*)の影響か味、見た目、香りまでも他国のカレーに比べて特徴的。

(*)サンスクリット語の「アーユス=生命」、ヴェーダ=知識」の複合語。インドスリランカの伝統的な医学であり、WHO（世界保健機構）からも公式に認められている。

- イギリスのカレー

日本にカレーを伝えた国だけあって、イギリスもカレー文化が根付いている。インド式の水気のあるカレーではなく、小麦粉でとろみをつけたカレーが一般的。日本のように牛肉や魚介類を使ったカレーはあまりなく、ほとんどが鳥肉を使っている。また、インドのように豆類や野菜を使ったカレーが好まれている。

- 日本のカレーは？

<カシミール料理> — Gidi fry

パンジャブ ヒマラヤ 40 日の山旅後、スリナガルでハウスボートに投宿し体を休めた。夕食時、ボーイが笑みを浮かべて鶏のから揚げのようなものを運んできた。香辛料が香るフライで歯触りは豆腐より硬く、チーズより柔らかめで、中の色は白濁色だった。口の中に広がる香ばしさは「美味しい」の一言だった。

料理名を聞くと Gidi fry だという。直訳すると「(羊の) 脳みそフライ」だった。絶妙なスパイス使いで、只々美味しい一言だった。地元鶴岡の冬の味覚「ドンガラ汁」(鰯汁)の白子が思い浮かんだが、それより歯ごたえがあり香ばしかった。その後の中東の旅でも好んで食べる部位となった。

<菜食主義>

ベジタリアンといっても動物性食品を一切食べないヴィーガンから、乳や乳製品、卵や卵製品は食べるラクト オボ ベジタリアンまで様々である。インド国民のおよそ 40%がベジタリアン、菜食主義者という統計がある。その根底にインド発祥のヒンズー教やジャイナ教の基本であるアヒンザー、非暴力、非殺生があるという。

今日のコルカタ、旧カルカッタ、ハウラー発、ニューデリー行エアコン付急行列車でベナレスに移動したときのことである。所要時間約 11 時間ということで、昼食と夜食を車内で食べた。メニューは肉食と菜食のみ。昼食時に肉食をお願いしたら、大きな皿のチキンカレーに野菜と果物がついた豪華なものだった。飲み物は清涼飲料の空きビンにミネラルウォーター1 本だった。

夕食時に菜食を注文すると、メモをとっている手がピタリと止まった。そして、大きな声で何やら話し始めた。どうも、先ほどは肉食で、今度は菜食か？と怒っている様子だ。インドでは、好みや好奇心で食べものを選ぶのではなく、生き方や厳しい人間性の表れであることに気づかされた。

＜アッサム茶園＞

北東インドのブラマプトラ河の両岸に広がるアッサム平原は、世界有数の雨量の多い土地であり、世界最大の紅茶産地である。4～5月に摘まれるファーストフラッシュから11月までの間が生産期である。6～7月のセカンドフラッシュがアッサム特有の濃厚な香りと味で最良品とされ、ミルクティーに向くとされている。

シッキムからアルナチャル プラデッシュ州に向かう時、アッサム茶園オーナーが経営するホテルに投宿した。バスタブ付きの広い部屋だった。直ぐにティーコージーで保温されたティーポットと甘みを抑えたケーキが運ばれてきた。従業員とゲストとの洗練された距離感が心地良かった。

翌朝、茶畑を車で回った。スリランカやダージリンの傾斜地と違いアッサムは平坦だ。所々にある大樹は日蔭で茶葉を守るためのものだ。早朝の茶畑は茶葉の香りに満ち溢れており、身体の中まで染み込む感じだった。



インドの工業

1947年の独立後のインドは、社会主義的な計画経済で国家統制を強めていた。従って、外国資本の導入にも消極的で、先進国の援助を受けながら、鉄鋼業などの基幹産業は国営企業が中心だった。特に、東部のダモダル川流域のビハール、オリッサ州で炭田と鉄鉱石に恵まれていたこともあり、ジャムシェドプル、アサンソル、ラーウルケーラなどで鉄鋼業が発達した。また、この地域ではDVC、ダモダル川流域開発公社による多目的ダム建設によって総合開発が進められた。しかし、このような手法は、旧ソ連や中国と同じ様に1960年代から停滞をみせ始める。

これを契機に、インドは本格的に経済開放政策を進めることになり、現在では外国資本を積極的に受け入れている。人口14億を超える人口を抱えるインドは潜在的な大市場として、先進国の企業にとって大きな魅力で、自動車、家電などの工場が次々に進出している。

インドで今、経済改革の成果がはっきり表れている分野はIT、情報技術である。南部のバンガロールは最も注目を集めている都市で、ハイテク関連産業やソフトウェア産業が集積している。今や、インドのIT産業はGDP、国内総生産の3%をしめ、特にアメリカなどからのアウトソーシング（企業の本業以外の業務を外部に委託すること）分野の成長が著しい。一方、植民地時代からつづく軽工業も盛んで、ムンバイの綿工業、コルカタのジュート工業など、港湾都市に繊維工業が発達している。

＜インドのシリコンバレー バンガロールの昨今＞

今日のバンガロールはIT企業の集積地となり、「インドのシリコンバレー」と呼ばれるまでになった。今から40数年前、ハイデラバードからの飛行機でバンガロールに飛んだ。手入れの行届いた美しい畑で、自然に怯えたような畑とは違っていた。また、大地が暴れひっかいたような赤い地肌も見当たらない。高原で涼しく穏やかで「インドのガーデンシティ」そのものだった。

ホテルに向かうオートリキシャで警察官と一緒にあったが農業、工業、文化とも他のインドとは違い豊かな地域であることを盛んに強調していた。乞食が見当たらないがの問いには、「居ない」と語気を強めて胸を張ったのが印象的だった。

午後、マハトマガンジーロードを散策中にスコールに遭った。レストランで雨宿りをしたが、若い女性客が7～8割を占めていた。時間帯にもよるのだろうが、これまでの都市とは明らかに違う光景だった。当時のバンガロールは国営の重工業を中心とした工場群が目立っていた。経済自由化後は情報通信産業、IT 産業の中心地としての地位を確立し「インドのシリコンバレー」と呼ばれるまでになっている。

カースト制度とインド社会

カースト制度は、紀元前 15 世紀頃インドに浸入して来たアーリア民族によってつくられた。1950 年憲法では禁止されているが、現在でも厳然として存在するインドの身分制度である。ヒンズー教徒ならば、この呪縛から逃れることは出来ない。人間は生まれながら社会の地位が決まっており、それを変えることはできない。職業、結婚など全てが、この古い社会制度のくびきにつながれている。

カーストとは古代の身分、職分制度の名残で、時代とともに変化しながらも今日まで継承されてきた。最高位は祭祀と知識を独占する司祭階級のバラモン、次位が王侯武士階級のクシャトリヤ、3 番目は経済の実験を握る商人階級の一般平民でヴァイシャ、最下位は奴隷のシュードラに大別される。そして、最後にカースト外存在として不可触民のダリットがある。この4区分をヴァルナという。ヴァルナはサンスクリット語で「色」を意味し、アーリア民族が先住民族の黒いドラビタ族と区別するために始まったとされている。

カースト制度というと、これに「生まれ」を意味する「ジャーティー」という社会的集団からなる身分制度が加われる。生まれながらにしてジャーティーは決まっており、各ジャーティーの間には浄、不浄の観念から上下関係ランキングがあり、その数は 2,000 と 3,000 ともいわれている。インドの人々がカーストという語を用いる場合、通常はこのジャーティーを意味している。

ヴァルナとジャーティーの関係は、四つのヴァルナが数多くあるジャーティーの枠組みのようなものであり、それぞれのジャーティーは、四つのヴァルナのどれかに含まれる。「カースト」は、ジャーティーを指して用いられるが、「カースト制度」というときは、ジャーティーとヴァルナも含めた制度全体を意味している。このようにインド社会では、ジャーティーが人々を厳しく規制しており、その大枠として外から支えているのがヴァルナであり、その背後にはヒンズー教の思想が存在しているのである。

＜マハトマ ガンジー＞

カースト制度、とりわけ不可触民、アウトカーストを不浄視し、差別する昔からの習慣をなくすことは難しいが、差別撤廃を目指して不可触民をハリジャン、神の子あるいは神の民と呼んだ人がいた。このヴァイシャ出身のマハトマ ガンジーである。彼はインドの独立、植民地解放運動、人権運動により平和主義を実践するなど、世界中に大きな影響を与えた。1948 年、イスラム教徒の銃弾に倒れ、“ヘー ラーム”（「おお、神よ」）とつぶやいて 78 歳でこの世を去った。国家の要職とは

無縁の一般市民の葬儀にもかかわらずインド全土から民衆が駆け付け、各国の要人が弔意を示すなかで荼毘に付され^(*)、遺灰はガンジス川をはじめ多くの川や海に撒かれた。

今日では、インド憲法第 17 条に、不可触性の廃止を明記し、違反者は法律によって罰せられるようになった。こうして商店、レストラン、沐浴場、ガートから締め出されることはなくなり、国会や地方議会の議員、国や州、公営企業の職員採用、大学の入学定員などに特別の枠設けるなどの優遇措置を定めている。

現在でもヒンズー社会に深く根付いているカーストから抜け出すことは不可能であるとされている。カースト制度では、親の仕事が自分の仕事になる。ところが、IT は新しい仕事でどのカーストにも属していない。そのため、身分に関係なく IT の仕事に就くことができる。インドで IT 関連仕事が急上昇しているのはそのためと言われている。

(*) ヤムナー河畔の荼毘に付された場所に、ラージガート (Rajghat=廟) が建てられ公園墓地となっている。最後の言葉が刻まれた黒大理石の慰霊碑があった。廟に入る時は素足になるが、石畳は焼けるように熱かった

<ベナレス> — ヒンズー教徒憧憬の地

ガンジス川の中流から下流にかけては、ヒンズー教徒の聖地がいくつもある。なかでもベナレス、ヴァラナシは、聖地の中の聖地と呼ばれている。ヒンズー教徒は、聖なるガンジス川で沐浴をすれば、全ての罪が洗い流されると信じている。

ベナレスにはガートと呼ばれる沐浴場が連なっている。その背後には寺院や宿坊、各地の藩王などの館が集っている。全国から集る巡礼者は宿坊に泊り、食事の世話を受けながら毎日、朝昼夕に沐浴する。なかには家族で自炊をしながら 1~2 ヶ月を過ごす人たちもいるし、聖地での死を待つ人々も投宿しているという。

人々は川岸に造られた沐浴場の石段を下り、男はパンツ姿で、女性は伝統的なサリーをまとったままで身を清める。頭を何回も沈めたり、顔に水を浴びせたりして破壊の神であると同時に創造の神でもあるシヴァを崇め、手を合わせて祈る。川の水は茶褐色に濁っており、お世辞にもきれいとはいえない。川岸では子どもたちがガンジス川に捧げる花を売り歩き、小路には物もらいや、のろのろと歩き回る牛がおり、騒がしさと独特な匂いに満ちていた。



人々が沐浴している近くに死者を荼毘に付する特別な場所があった。木を積みあげた上に白 (男) や赤布 (女) で覆われた遺体をのせて火をつける。骨と灰は聖なるガンジス川に流す。人は輪廻転生から永遠に解放されると信じられているからである。荼毘に付す場所はブロックで囲まれているが、川面を行き来する観光客を乗せた舟からは丸見えであるし、ブロック塀にはハゲワシが群れをなしている。そして、ガート (沐浴場)、荼毘の場所の間では体の半分を水に沈めて川岸の泥をザルですくいあげ古いコインを探すのに余念のない人々がいる。

ヒンズー教のご神体リンガ (男根) とヨニ (女陰) 合体像

上流で、渦巻く茶褐色の川面から空中に舞い上がり、舞い降りる鳥の群れが見えた。流れてきたのは牛の死骸だった。腹部はゴム毬のように膨らんでいた。その脇に鳥を追い払う人間が一人泳いでいた。ガンジス川は地上の全てものを溶かし、飲み込み洋々と流れている。やや膨らんでいるように見える川面の対岸には人為的なものは何一つ望めなかった。

ベナレスで沐浴したヒンズー教徒は、ガンジス川の水をお土産に持ち帰る。巡礼できない人々に功德を分かち合うためだという。インドでは人口の約 80%はヒンズー教徒で、そのほかに約 10%のイスラム教徒をはじめ、シーク教徒、ジャイナ教、キリスト教徒などがいる。

【資料】聖なる川 世俗に汚れ 大幅に基準上回る大腸菌

ヒンズー教徒が沐浴する「聖なる川」として知られるインド北部のガンジス川で、水質汚染が深刻化している。以前から川岸に立地する工場の排水や生活排水による汚染が指摘されてきた。今年公表された政府の調査では、基準を大幅に上回る大腸菌が検出され、沐浴による健康被害が懸念されている。ヒンズー教でガンジス川の沐浴は「罪を洗い流す」とされ、多くの信者が実践している。地元紙ヒンドゥスタン タイムスによると、ヒンズー教の聖地サンガムがあるアラハバードのガンジス川では、2017 年に基準値の5～13 倍の糞便性大腸菌が検出された。サンガムのほかベナレスなど聖地とされる場所は、他の場所に比べて汚染が深刻だった。ガンジス川の水質改善を訴えるインドの NGO「セーブムーブメント」によると、ガンジス川はサンガムやベナレスといった聖地の手前で流れが極めて遅くなるため、聖地では汚染物質が滞留しやすい。同 NGO のラマ ロータ代表は毎日新聞の取材に「川の近くにトイレを整備したり、洗濯を禁止したりするなどの対策が必要不可欠だ。政府の対策は不十分で、より真剣に取り組む必要がある」と指摘した。 (2018/4/3 毎日新聞)

【資料】仏教やキリスト教とヒンドゥー教の違い

仏教やキリスト教は「世界宗教」で、基本的にはその人と個人の信仰・思想がまずあり、それに基づいて宗教的生活が営まれる。ヒンズー教徒の場合、その人個人の信仰心というよりは、社会全体の行為規範や考え方、習俗の根底に宗教がある。そして、それに従うことがまともなヒンドゥー教徒とみなされる。これを逆に言えば、ヒンズー社会に認められている宗教的観念や習俗を守って生きさえすれば、いかなる神を信じ、どんな思想をもてもかまわない。

<ボンベイ（現ムンバイ）>

セントトーマス大聖堂、ボンベイ大学とスマートな時計台、ビクトリア駅などなど重厚なイギリス風の建築が建ち並んでいた。これらをバックに赤い二階建てバスが走る。ボンベイは言わずと知れたイギリス支配の拠点だった。

地図を片手に方角を頼りにクロフォードに向かった。だんだんと街全体が暗くなってきた。汚れた人々が増えてきた。路上に座り込む人、寝転ぶ母子が多くなるにつれて、路上に犬、人糞が目立ってきた。体の汚れを衣代わりの子ども、虚ろな



鉄道駅

目で母親から水を飲ませてもらう子ども、布切れにくるまって路上に寝かされている赤ん坊、客が食べ終えた皿をひと撫でした手を舐める子ども、両手両足がなく、路上に寝たまま恵みを乞う老人、その老人に向かって執拗にクラクションを鳴らす太ったインド人の乗る車。いずれもクロフォードマーケットでの光景だ。

ここから「女王の首飾り」に例えられるバック湾を望むマリンドライブに抜け出したとき、思わずため息が漏れ、腰が砕けてしまった。これほどの人間の圧力を感じたことはなかった。身につけてきた「人間愛」とか「道德観念」とか「社会通念」といったものは、何だったのだろうか。悶々しながらしばらく考え込んでしまった。気が付くとヤシの葉陰に、アラビア海を照らす月があった。約半世紀前ながら、当時の日記に書き記した強烈な印象のクロフォードマーケットである。

<エローラ石窟寺院群>

ムンバイの北東、オーランガバード郊外にデカン高原の黒々とした岩山をくり抜いた石窟寺院がある。南北2 kmに連なる石窟寺院を一望した時、オーランガバードからの30数kmはタイムマシンそのものだった。その規模は、インドの文化の深さに驚嘆し、そのエネルギーに恐れに似たものを感じた。南端の1から12石窟は、5～7世紀に造られた仏教石窟で、主に修行のための僧院。13～29窟は、7～9世紀に掘られたヒンズー教石窟、北端の30～34窟は9～10世紀に掘られたジャイナ教石窟である。インド発祥の3つの宗教寺院群が一か所に集まっているのは珍しいという。

これは宗教に寛容なインド人の懐の深さ、寺院建造へと心を動かした力の大きさに恐れに似たものを覚えた。しかもただ掘りぬいたものではない。規模が大きいだけでもない。日頃、宗教に熱心とは言えない自分でも各寺院の区別ができた。どれもデカンの自然の岩壁を彫り、内部に屋根、外周の柱廊まで掘り残したものだった。物言わぬ石像だが、石特有の冷たさを感じなかった。繊細な浮彫には命が宿り息づいていた。



造られたのが何年前であろうと自分にはどうしても良かった。心臓の高ぶりを抑えて、石窟に吸込まれ、動けなくなったことで充分であった。人間のなせる業は無限である。偉大であるとともに、恐ろしさすら感じる。茜色に染まったデカンの地を群れ飛ぶ鳥を見ながら帰路についた。デカンの遺跡の上の昇った月はおぼろだった。

<アジャンタ石窟寺院群>

エローラの余韻が、朝になっても消え去らなかった。今日もう一日エローラ石窟の中に身を置いてみたい気持ちだった。その一方で、アジャンタへの誘惑も大きい。特に、法隆寺に残る壁画に多大な影響を与えたのではないと言われる壁画の数々、世界三大石仏の1つシャカ涅槃像を早く拝みたい気持ちに揺れながらバスターミナルに向かった。幸か不幸かアジャンタ行きのバスが客待ちしていた。バスの先客は大阪の私立大教授、韓国、フランス、ドイツ人の5名だった。

アジャンタまで106 km、所要時間3時間だった。アジャンタ村を抜けたところに展望台があった。

ワゴーラ川の侵食谷を挟んで、目指すアジャンタ石窟群と対峙していた。見事な水平地層を曝け出した侵食崖に石窟群が並んでいた。黒々とした自然のままの岩に、強い信仰心で立ち向かった証である。途中数百年間作業中断があったというが、7～800年の歳月を費やしたエネルギーと情熱を思う時、ずっしりとした歴史の重みを感じた。

アジャンタ石窟群は、規模からすれば昨日のエローラには及ばない。しかし、1つ1つの石窟は素朴さの中に力強さがあった。仏教における礼拝の対象が、仏塔から仏像へと変わる様子が何となく理解できた。中でも、26窟側壁の「シャカ涅槃像と死を嘆く仏弟子」の巨像には見入ってしまった。固いものの代名詞の石が、これほどまでに温和で荘厳な表情を醸し出すことができることを知った。経典にある「名もない花、雑草としての一輪の花の中にも、無限の宇宙の生命が躍動する」は、俗人には理解しがたいところもあるが、シャカ涅槃像を見ていると素直に受け入れてしまうような穏やかな力を秘めていた。

アジャンタはこれらの石窟の外に仏伝やシャカの前世の物語を題材にした壁画でも有名だ。どれもグプタ時代様式とあったが、自分の理解の範囲を越えていた。第1石窟の Bodhistva Padmapani はじめ、端正で気品に溢れているものを前にした時、妙に「日本的」なものを感じた。隣で「うーん！」と驚きの言葉を発している大阪の大学教授に壁画の説明をお願いした。説明の中に「法隆寺金堂」の言葉を耳にした時、「あ！これか！」と納得した。確かに似ている。6,400余kmも離れた日本に影響を及ぼす宗教の情念と力、それらを受け入れた文化の高さに驚かされた。ここインドから始まった石窟寺院は、アフガニスタンのバーミアンへ、さらにはロマンの香漂う敦煌の千仏洞へ、そして朝鮮半島南部の慶州へと伝わった。

＜カジュラホ＞ 乱舞するミトゥナ像

カルカッタ（現：コルカタ）からベナレス経由でカジュラホに入った。手始めはホテルから政府観光局へ向かう時のオートリキシャとの交渉である。「いくら？」、「5ルピー」、「メーターは？」、「動かない。4ルピー」、「高い！」、「それじゃ3ルピー」、「ノーサンキュー！」、「メーターとおりでOKだ」。メーターは1ルピー80パイサだった。

カジュラホは、今から800年ほど前、即ち9世紀から15世紀にかけてチャンデーラ王朝の首都として栄えた。7世紀に三蔵法師も訪れ、「多様な僧院があり、全インドから学者の集まる文化の中心地である」と記している。今日では代々の王朝は姿を消し、85あったと伝えられている寺院のうちわずかに20の寺院が、昔を今に伝える農村である。現存する寺院は、カジュラホ村を中心とする東グループ、約4km離れて南グループ、そして、カジュラホ寺院の群の代表である西グループである。

5時に行動を始めた。真夏のインドに登る太陽は、地上の全てを支配する。しかし、早朝の斜光に浴した石のミトゥナ像、男女の交わり像は息づき、躍動し始める時である。木立を通して射し込んできた陽光は、石像に優美な動きを促している。ふっくらとした頬、愛嬌のある顎、半月の眉、球体の乳房と臀部が艶めかしい。よく見ると、薄い絹布をまとっていた。シルクの半透明を石で表



現とは驚きであった。

インドの国境紛争

独立時からのカシミール帰属を巡る争いの他に、イギリスの仲介で設けられたマクマホン ラインをめぐって中国との国境紛争がある。

<カシミール問題と核>

スリナガルはインド北部とパキスタン北東部の国境付近に広がる山岳地帯である。風光明媚な風景とは裏腹にカシミールの帰属をめぐってインドとパキスタンの対立が絶えない係争地である。さらに、パキスタンから中国に割譲された地域も加わりインド、パキスタン、中国の3カ国が主張する国境が入り乱れた複雑な地域である。

カシミールの住民の大半はイスラム教徒である。当然パキスタンへの併合を求めたが、支配者の藩王がヒンズー教徒だったことからインドに編入された。ここから3次にわたる印パ戦争(1947、55、71)があり、今は心もとない停戦ラインが引かれている。両国の対立は激しく、核開発(*)の応酬までエスカレートしてしまった。今日でもカシミールへの出入時は、厳しい荷物の検査がある。

このような宗教上の対立の不毛を説いて、インドの一つの国家として独立させようとしたマハトマ ガンジーは一本化に反対するヒンズー教徒によって命を奪われてしまった。

(*) 核保有国：アメリカ、ロシア(ソ連からの継承)、イギリス、フランス、中国の五大国の他に、インド、パキスタンが保有している。イスラエルも公式な保有宣言をしていないが、保有国とみなされている。これに北朝鮮が保有を表明している

<消えた王国と国境紛争>

北シッキム地域への入域には、インド入国のビザ、シッキム州入域許可証に加えて「北シッキム入域特別許可証」を取得しなければならなかった。しかも、旅行代理店を通さないと許可が下りないところで、滞在期間にも制限があった。シッキム州は、古くからインドとチベット交易のメインルートであり、1975年までの約300年間、シッキム王国であった。もともとはチベット語系レプチャ人が住んでおり、17世紀にチベット人(ブディヤ人)がシッキム王国を建てた。19世紀になるとイギリスの保護国となり、茶エステートの労働者として大量のネパール人を移住させた結果、全人口の75%以上を占めるようになった。その結果、チベット系の王政は弱体化し、民主化の要求なども出始めた。1947年、ネパール人のデモ隊に王宮警備隊が発砲したことから騒乱状態に陥った。中国の介入を恐れたインド政府が軍を派遣し、1975年、王政廃止と同時にインドの州として編入した経緯をもつ。



ゼロポイントー山肌を横切る道路が見えるが通れない

しかし、中国は、シッキムは清朝の属国であったチベットの属国ということで、インドによるシッキムの併合を認めず、中国の地図で独立国として記載されていたという。そして、シッキムにお

けるインドの主権を承認したのは、なんと 2003 年である。

＜中印国境紛争＞ アルナチャル プラデッシュ州

アルナチャル プラデッシュ州は、インドと中国の国境紛争地帯で、インドが実効支配している領域に設けられた州である。そもそも紛争の始まりは、チベットと中国の紛争を調停したシムラ会議であった。イギリスの全権代表を務めたヘンリー マクマホン卿が、イギリス領インドのアッサム地方とチベットとの境界をチベット側に受諾させた。これがマクマホン ラインである。ところが、チベット系住民の分布領域よりかなり北、ヒマラヤ山脈に引かれている。このため、チベットは中国の一部と主張する中華民国、その後の中国ともに、この境界を国境とすることを拒否してきた。そして、1959 年～1960 年にかけて中国がマクマホン ラインを越えてきて武力衝突があった。インドは東北辺境地区として管理してきたがこれを機に実行支配をより強固なものにするため 1987 年に州に格上げし今日に至っている。

第二次世界大戦後インドの独立に伴い、イギリスのインド撤退を見計らって中国人民解放軍をチベットに送り込み、1950 年に制圧し、無理やり併合してしまう。この中国の横暴に対してチベット民衆の抵抗活動は高まり、1959 年、首都ラサで民衆が大規模な反対行動を起こした。ダライ ラ



マ 14 世は、流血の拡大を避けるためインドに亡命し、インド北部のダラムサラにチベット亡命政府を設立し、現在に至っている。

「ダライ ラマを引き渡せ」と要求する中国と、これを拒否するインドとの関係が悪化し、中国軍のインド侵攻、即ち 1962 年の「中印国境紛争」へと発展していく。即ち、マクマ ホン

タワン僧院 — ダライ ラマ 14 世が亡命途上長期滞在した

ラインを越えて中国軍が突然侵

攻してきた。丁度、キューバ危機で世界の関心がキューバに集まっていた時で、中国の計算し尽くされた行動であったとの見方がある。これに対して、インドも応戦し、戦争状態に入った。戦況は中国軍に圧倒され、一時的ではあるがほぼ全域を支配された。ところが、中国の一方向的に停戦、撤退を表明しマクマホン ライン以北へ撤兵して終結する。記録によるとインド軍の死者 1,383 名、負傷者 1,047 名、行方不明者 1,696 名、中国側は死者 722 名、負傷者 1,697 名と記されている。中国はマクマホン ラインの不承認を実力行使で示したことになり、国境問題は依然として未解決のまま、棚上げされた状態である。

中国のインド侵攻時、同時にブータンにも侵攻し、国土の 20%を奪い取った。中国軍は国境を無視し、勝手に道路をつくり、中国の領土の標識を建てたという。その後、話し合いがもたれたが解決に至らず、未だに国交がない。そして、ブータンはインド軍の駐留を認めて中国を牽制している状態である。

＜アルナチャル プラデッシュ州 アパタニ族の奇習＞ ― 鼻栓

アルナチャル プラデッシュ州は 80%が森林に覆われており、道路は南北に切られているが、それを結ぶ東西の道は極端に少ない。従って、山奥には独自の生活文化をもつ部族が、強力な権力によって統一されたこともなく、険しい地形と、厳しい自然環境に守られ、今なお昔からの伝統のもとで暮らしているという。世間一般のインドのイメージとは全く別の世界である。一説によると、アルナチャル プラデッシュ州には 25 の民族が住み、200 の部族に分類され、3,600 の集落で暮らし、それぞれ違う言葉、服装、習慣、宗教だという。

アパタニ族のボン村に入った。彼らはチベット仏教やヒンズー教徒ではなく独自の神、「太陽と月の精霊」を「ドニ ポロ」と呼んで崇めている。この「ドニ ポロ」と意思疎通ができて、神のお告げなどを村の人々に伝える役目を負うのが「シャーマン」霊媒師と呼ばれる人たちである。アパタ



ニの世界ではこのシャーマンが僧侶であり、医者であり、大事なことを決める時には色々な役回りを果たす。

ホン村の家は申し合せたように切妻屋根の高床式で、同じ規模だ。そして何よりも壁は竹、新築家屋はトタンがちらほら見られたが屋根も竹だ。階段の手すりも竹、テラスも竹だった。

集落の端に民家 2 軒分くらいの建物があった。白く塗られた壁を縁取りした柱は青色で目立っていた。前になり、後ろになり笑いながら、はにかみながら歩いてきた制服姿の子供たちが吸い込まれていく学校だった。児童数 20 名、数名の教師が近郊から通ってくるという。50

年ほど前のインドでは考えられない教育の普及ぶりだ。

帰路、農作業から帰る女性に会った。アパタニ族の象徴ともいえるノーズプラグ、鼻栓を小鼻にし、額から顎にかけて刺青をしていた。アパタニ族の女性にだけ見られるこの風習は、その昔、アパタニ族女性が美しいが故に他部族の男に誘拐されることが多かったからだという。他部族の男の気を惹きつけないようにわざと醜くしたのが起源だと聞いた。このノーズプラグと刺青の風習は次第に廃れ、今ではある一定の年齢の年配に限られているし、法律で禁止されていると聞いた。もう 20 年もすると地上から完全に消える風習である。

この奇妙なノーズプラグ、鼻栓は藤や竹からつくった炭だという。木を燃やして炭にして、硬く滑らかな板に炭を擦りつけ表面を滑らかにして嵌め込んでいるのだという。洗顔や就寝中も外すことはない。古くなると夫が山から木を伐りだし新たに作るのだという。

顔に刺青の部族は他にも見られるが、ノーズプラグ、鼻栓を入れているのは、文化人類学辞典を見てもアパタニ族特有の風習のようだ。始まりの理由はどうあれ、彼女たち自身は、自分たちの容貌をどう思っているのか気になる。3 人の女性に「写真を…」とお願いしたが、嫌な顔をしないで応じてくれた。

スリランカ（スリランカ民主社会主義共和国）

「光り輝く島」の意味を持つスリランカは、「太陽の光の島」、「地球の明るい庭」、「奇跡の島」、「インド洋の真珠」など枕詞が多い。13 世紀に訪れたマルコポーロは、「世界で一番ちょうど良い大きさの島」、「ここは世界で一番素晴らしい場所」と称している。旅行業界誌（2010 年ニューヨークタイムズ誌、2013 年ロンリプラネット）でも「訪れるべき第一国」、「最も旅行したい国 No.1」と高い評価を得ている。島全体が、年中緑に深々と覆われ、ブーゲンビリアが咲き、バナナやココナッツ、マンゴー、パパイヤなどが実る典型的な熱帯の国で、今も昔も旅人を惹きつける魅力ある国である。人口は 2310.4 万人（2024）、首都はスリ ジャヤワルダナプラ コッテで、「聖なる勝利をもたらす都市コッテ」の意味。通称コッテ。1985 年、コロンボから遷都されたが、国会議事堂以外めばしい施設は無い。

主食は米で 1 人当たりの米消費量が日本人の 2.5 倍。自給率 120%と米が圧倒的に主流。パサパサした細長いインディカ種で、何処に行っても肉、魚、野菜、果物などのスパイスの効いたカレー料理が楽しめる。メソポタミアからインド北部伝わった小麦粉文化も入ってきたのだろうが、インドに比べると極端に少ない印象だった。

＜スリランカカレー＞

インドと同じくカレーは、「カレーで味付けした料理の総称」である。ほのかに甘いココナッツオイルを使用し、インドの動物性の脂を使ったカレーに比べて、あっさりした味が特徴であった。街の食堂では 80 円前後で一般大衆の食べ物である。日本のカレーライス、学校給食人気メニューで、親世代 2 位、現代っ子で 3 位と日本の国民食になっているが、カレーはインドからイギリス、そして日本へと長い旅路を経て本家本元のインドカレーから大きく変化している。



オクラカレー



食堂のカレー



イカカレー

【資料】カレー粉はもともと漢方薬

カレーに使われているスパイス自体が漢方薬の役割を持っていた。さらに体を温める効果や、肥満解決にも役立ち、それに加えて美味しいとくれば、こんな健康食は他にない。カレーに用いられる代表的なスパイスの効能を調べてみた。

主なスパイス

- ・ターメリック（鬱金 うこん） 鎮痛、二日酔いなど
- ・コリアンダー（胡子 こずいし） 胃薬、かゆみ止めなど
- ・クローブ（丁字 ちょうじ） 消化機能促進、消炎など

- ・シナモン（桂枝 けいし）、肉桂（にっけい） 胃の薬、風邪など
- ・レッドペッパー（蜀椒 しょくしょう） 咳止めなど
- ・フェンネル（茴香 ういきょう） 去痰、胃の薬など
- ・カルダモン（縮砂 しゅくさ） 胃の薬など
- ・クミン（馬芹 うまぜり） 胃の薬など
- ・ナツメグ（肉豆蔻 にくすく） 胃の薬、下痢止めなど

＜ココナッツウォーター＞

車道沿いの何処でも見かけられるのが自転車で運んできたココナッツウォーターの露店である。ココヤシの果実で、熱帯では人気の飲みものである。自然の中で育まれた地下水などがヤシの木を通して実に蓄えられた水分で、脂肪やコレステロールを含まず、新陳代謝を活性化させるカルシウム、マグネシウムなどが豊富で、疲労回復や解毒効果が期待できることから「飲む自然の点滴」ともいわれている。生理食塩水が入手困難な発展途上国では、静脈点滴に用いることもあるという。

注文すると、緑色の皮のヤシの実を片手にして、大きな鉈のような刃物で器用に蒂の部分から2、3度そぎ落とす。時間にして数十秒である。無色透明に近く、ほんのり甘い。どっか青臭みがあるが、冷え過ぎていないので体への負担が少ない。コップ一杯で普通のスポーツドリンクより多くの電解質を含み、体液にほぼ等しい浸透圧で吸収され易く、運動後の水分補給に最適な飲みものだという。飲み終わると果実を二つに割り、身の内側についた白い果肉をそぎ取って食べた。

日本でもココナッツウォーターが販売されているようだが、庄内ではまだ見ていない。ペットボトルやアルミ缶、紙パックに詰になると添加物で味微妙に変わるが…。

ココナッツウォーターの特徴、優れた点

- * 生理食塩水が入手できない発展途上国では、ココナッツウォーターが静脈点滴に用いられることもあるとか。
- * コップ1杯で普通のスポーツドリンクより多くの電解質を含んでいる。
- * 体液にほぼ等しい浸透圧のため吸収され易く、運動後の水分補給に最適
- * カロリーはスポーツドリンクの300キロカロリーに対し、ココナッツウォーターは46キロカロリーと1/6以下
- * ココナッツウォーターには、バナナの2本分の「カリウム」が含まれている
- * マグネシウム、カルシウムなどのミネラルが豊富で、酵素の働きや新陳代謝を活性化させるため、疲労回復や解毒効果が期待できる
- * 脂質は含まれておらず、ダイエットにはぴったり

＜セイロンティー＞

オランダ人によって導入されたコーヒーが栽培されていたが、サビ病で壊滅的な被害を受けた。それに代わったのが茶で、1882年、イギリス人がインドのアッサム地方から移植したことから始まった。茶産業は急速に成長し、農産物輸出総額の60%、輸出総額では14.5%を占めるまでになった。セイロンティーのウバ茶は、インドのダージリン、中国のキーマンと並んで世界三大紅茶の一つに挙げられている銘茶である。

栽培はイギリスの植民地当時、避暑地として栄えた標高 1,900m 又ワラエリヤで、南部内陸部に広がる中央高原が中心地である。今でも芝生の庭を前にした木組の外壁のイギリス風建物が点在し、高級ホテルはインド人、アラブ人で賑わっていた。

＜茶摘み労働者＞

宿泊したのが街外れのロッジで、背後は一面茶畑だった。茶畑の散策に出た。又ワラエリヤの冷涼な山岳地帯の丘という丘、斜面という斜面全てが茶木で覆い尽くされていた。車 1 台がやっと通れるほどの小路に身を置くと、茶葉の香りが漂い、深緑色に体の芯から染まりそうだった。



茶葉の摘み取り仕事は女性の手作業である。作業は 7:30 から 16:30 頃までで、1 日のノルマは 1 人 16 kg。一所懸命やらないとこなせないという。摘んだ量に応じてボーナスをあるようだが、日給は 300 円位だという。雨の中、粗末なビニールを体に巻き付けた雨具で茶摘みする姿は痛々しかった。

茶畑の中にぽつりぽつりとティーファクトリーがあり、その近くに一見長屋風の粗末な建物が密集していた。茶畑と茶工場で働く人々の住居で、家屋も食料も会社負担だから日当が極端に低いのだという。

広大な茶木の頭がそろい、茶畑内の小路や白い石造りの排水路が規則正しく緑の山肌に刻み込まれて、この上なく美しかった。日本の水田こそが究極のガーデニングと思い続けてきたが、この茶畑もまた同じだった。しかし、天候にかかわらず働き続け、茶葉乾燥のため高温で埃っぽい工場内での作業、生活のすべてを会社にゆだねる生活が、プランテーション農業(*)の現実で、私たちに届く紅茶はこうした人たちの低賃金と苦しい労働による産物である。



リプトンシートへの道

茶畑で働く人々は、植民地時代にインド南部から渡ってきたタミル人の末裔で、人口の 18% を占めヒンズー教を信仰している。国民の 73% が、インド北部のアーリア系シンハラ族で仏教を信仰している。1956 年、シンハラ語を公用語にする法案を成立させるとタミル側が反発し、後に民族間の内戦（1983～2009）にまで発展した。

（*）プランテーション農業

先進国の企業などが発展途上国の土地と安価な労働力を利用し、単一の農作物を大量に生産する農業。作られ

た農作物は輸出目的のため、その国での食料にはならない。それどころかプランテーション農業に多くの労働力を費やしてしまうため、逆に食料難になってしまうこともある。茶、コーヒー、カカオ、バナナ、砂糖、綿花、麻など

<リプトンシート>

リプトン侯が茶畑の眺望を楽しんだという「天空のリプトンズシート」のあるハプタレーに移動した。どうしても訪れてみたいところで、日本を出発する前スリランカの業者に問合せたら、許可申請が必要かも…の返事をもらった。

リプトンとは、サー トーマス ジョンストン リプトンで、イギリスの紅茶ブランド「リプトン」の創業者である。彼は、「茶園から直接ティーポットへ」をスローガンで、ティーバックによる紅茶の大衆化を実現した。



ハプタレーから茶畑の中を 18 km。車道幅は交差不可能なほど狭く、ヘヤピンカーブでは 3 度スイッチバックした。山頂の展望台には「ようこそリプトンズシートへ」の看板が立っていた。雨と霧で視界は駄目だったが、小さな石造りの売店で、ミルクティーと揚げたてのスナック菓子で、店主と一緒にチェコのカップルと語り合った。ようやく雨が上がった。霧が流れ始め、霧の切れ目から雨に濡れた茶畑が広がり、色とりどりの服装で働く人々が点々と望まれた。

夜、チェコ人と同じホテルになった。山麓に建つ茶工場までバスで来て、リプトンシートまで歩いたという。ハプタレーに宿をとり、1 日かけてのハイキングに最適なところのようだ。

スリランカの仏教

スリランカはダイヤモンド以外の宝石が採れる国でも有名である。「宝石がスリランカ人の外を装うものならば、心の支えは仏教」である。イギリスの植民地であったインドが、インド、パキスタン、セイロンに分離独立する時、宗教が大きく働いた。スリランカは、シンハラ族を中心に人口の 73%が仏教徒であるが、他にタミル族のヒンズー教 18%、アラビア人が伝えたイスラム教、ポルトガルやオランダ人が伝えたキリスト教などなどが共存している。



宝石掘り

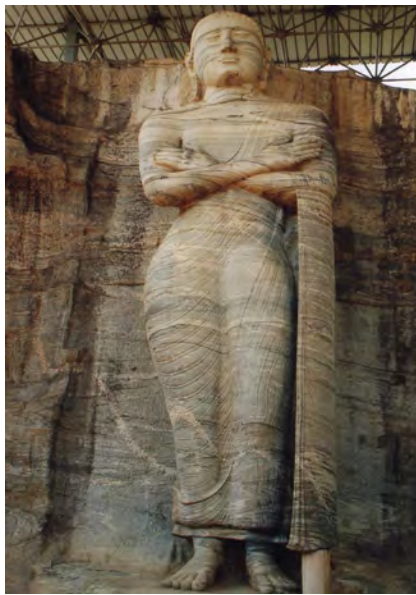
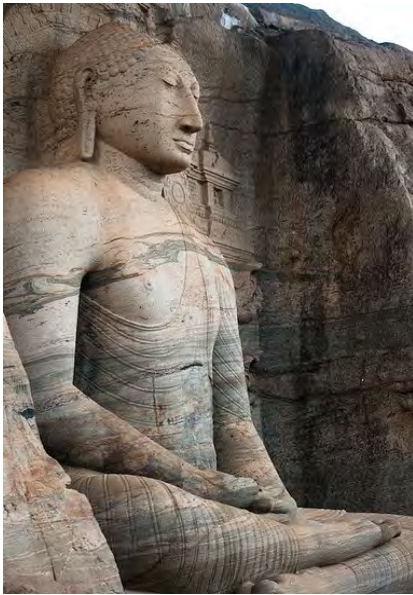
インド、ブッダガヤあるいはサールナートで紀元前 5 世紀に生まれた仏教がスリランカに伝わったのは紀元前 3 世紀、中国は 1 世紀で、日本は 6 世紀の中頃より 1,000 年も早い。

日本の仏教は、インドから中央アジア、中国そして韓国経由する間に、さらに日本に伝わってから変化した。シャカだけでなく阿彌陀如来、大日如来、薬師如来、観音菩薩、地蔵菩薩も信仰の対象となっていた。その例が釈迦や仏陀は漢字で表現される。シャカが説いた教えを記録したものがスートラ、経典で、パーリ語、サンスクリット語だったが、中国の漢字に代わった。仏教はガンダーラ経由で唐に入ると、高度な中国文化の影響を受け変化してしまう。

玄奘三蔵は真の仏教を求めてインドへ（629～645）、河口慧海はインドからチベットに逃れたオリジナルの仏教を求めてチベット（1901～1902、1913～1915）に行っている。これに対して、スリランカではシャカそのものが信仰の対象で、シャカの遺骨や歯を収めた仏舎利、シャカの座像、立像そして涅槃像が信仰の対象となっていた。また、悟りを開いたという菩提樹そのものも対象になっていた。

今日のスリランカの仏教は、ミャンマー、タイやカンボジアなどと同じく修行を重んじる小乗仏教である。しかし、インド直伝のものとは違い 18～19 世紀にかけてタイやミャンマーから逆輸入したものだという。

スリランカ統一国家の成立は紀元前 5 世紀で、インド北部から移住してきたシンハラ族によってシンハラ国がアヌラダプラに成立し、1,400 年も続いた。ここが仏教受け入れの中心地となって、スリランカ全土へ、さらには東南アジアの国々へと広まった。他にインド直伝の遺跡は、アヌラダプラに続いて 11～13 世紀にスリランカの都であったポロンナルワである。バラクラマ パーフ 1 世が国力の増強と仏教に力を入れ、大仏教都市として栄えたという。その名残が南北 10 km以上の広さに遺跡が分布していた。当時の栄華を伝えるものとして大きな岩に刻まれた「座る」、「立つ」、「寝る」という人間の自然の姿をとりながら瞑想するブッダの姿があった。



＜仏歯寺＞

今日のスリランカ仏教を代表する寺院、スリランカ仏教の核になる寺院は、キャンディにあるダラダ マリガワ、仏歯寺である。スリランカ仏教界最大の至宝である「仏歯」が納められている。仏歯は紀元前 543 年、インドでブッダが火葬されたとき手に入れたものだという。寺院の参拝は、明け方から黄昏までできるが、仏歯を祀る部屋は 1 日 3 回だけ小さな窓が開き、この窓越しにお参りすることができる。黄金を散りばめたような豪華な内装の部屋の中央に、黒の台座に乗った高さ



50～60 cmの宝石をちりばめたまばゆいばかり黄金の仏塔が仏歯の容器だった。全仏教徒の崇拝的であるとともに、シンハリ人による国家形成の歴史における統一のシンボルでもある。

日本分断の危機

アジア諸国は、16世紀初めから20世紀後半までヨーロッパ諸国の植民地であった。免れたのは日本とタイと実質的にはイギリスの支配下だったネパールだけだった。海上交通の要地であり、スパイスの中でもシナモンの産地として知られるスリランカは植民地化された。最初はポルトガル、オランダそしてイギリスと宗主国が変わったが、443年間の長きにわたる。

第二次世界大戦中、スリランカを植民地支配していたイギリス軍の港や空港を、日本軍が攻撃した。このことによりスリランカは日本に賠償請求権をもつことになった。日本の国際社会復帰を話し合うサンフランシスコ講和会議（1951）で、当時のソ連を中心に日本の分断、主権の制限、高額な賠償金などが議題となっていた。この会議に当時のセイロン代表として出席していたカジャヤワルダナ蔵相、後の第2代大統領が日本をかばう演説を行っている。

【資料】 <日本の分割統治計画>

日本の分割統治計画とは、第二次世界大戦においてドイツが降伏後、米・英・ソ・仏4カ国に分割統治されたように、本土決戦後の日本も北海道・本州・九州・四国を連合国それぞれが統治しようとした計画。アメリカ国立公文書記録管理局に現存する計画書によると

- 北海道・東北 - ソ連占領地域
- 関東・中部（福井県を除く）及び三重県付近 - アメリカ占領地域
- 四国 - 中華民国占領地域
- 中国・九州 - イギリス占領地
- 東京35区 - 米・中・ソ・英の共同管理
- 近畿（三重県を除く）及び福井県 - 中華民国とアメリカの共同管理

という計画であった（下の地図参照）



もし、日本が資本主義と社会主義社会に分かれていれば、今の北朝鮮と韓国、かつての旧東西ドイツ、南北ベトナムのように、同じ言葉話す民族同士が対峙するという悲しい歴史になっていたかも知れない

（アメリカ国立公文書館に現存する計画書による日本の分割統治計画）東京都区部は米中ソ英4カ国、近畿と福井県は米中2カ国による共同統治。左図はPCからコピー

「日本の掲げた理想に、独立を望むアジアの人々が共感を覚えたことを忘れないで欲しい」と述

べ、「憎悪は憎悪によって止むことはなく、慈愛によって止む」というシャカの言葉を引用した演説で、参加国に寛容の精神を求め、日本に対する賠償請求権を放棄した。

さらに、「日本は真に独立した国でなければならない」と述べ、日本分断に反対し、日本の独立を維持することと、国際社会に復帰するために強力な働きかけとなった。

テレビ番組の「世界ふしぎ発見」に出演していたスリランカ出身の落語家、にしゃんた氏によると、スリランカでは子どもからお年寄りまで誰もがジャヤワルダナ氏と日本の話を知っているとのことだが、このことを知る日本人はどれ位いるだろうか。同じ仏教国ということもあるだろうが、長く植民地支配に苦しんだスリランカにとって、日本は憧れの東方の星だったと思える。他に、日本で学んだ経験のある中華民国、台湾の蒋介石も「報怨以德」（怨みに報いるに徳を以ってする）に基づいた反対意見を述べている。

＜スリランカの印象＞

スリランカの自然の豊かさと人々の優しさと穏やかさが蘇ってくる。茶畑の規模は、想像を遥かに超える規模で、庭園のように美しかった。しかし、その裏には、長屋に住み、天候と関係なく過酷なノルマを課せられている会社任せの低賃金労働者がいることも現実だった。

海のシルクロードの拠点だったコロンボは、海岸沿いに高層ビル群が建ち並び、街中は車線と関係なく割り込んでくる車の洪水だったが、海岸では打ち寄せる波と戯れる大人と子どもの姿があり、風揚げに興じる人、散策する人々に溢れていた。

国内を自由に周遊可能で、観光立国として発展していた。他のアジアの国々と比べても治安は良好で、何よりも親日的である。初等教育から高等教育まで無償で、識字率は95%を越えアジアではかなり高く、近代化への道を実実に歩んでいる印象を受けた。最低限のマナーを守れば一人旅入門国という感じだった。

ネパール（ネパール連邦民主共和国）

ネパール王国の起源となるグルカ族によるシャー王朝（グルカ朝）が、18世紀後半にほぼ統一国家となった。その後、イギリス勢力下に入ったが、王朝が権力を維持し、アジアでは日本、タイと並んで植民地にならなかった。その理由として考えられることは、イギリスがインド支配で手一杯であったこと、ネパールは山岳地帯で資源がそれほど豊かでなかったことなどがあげられる。第二次世界大戦後、イギリスがインドから撤退し、国王の主要な支援者イギリスがいなくなると政情不安になり、2015年、王政から連邦共和制に移行した。人口2965.1万人（2024）。

国土の東西と南がインド、北は中国チベット自治区に接する内陸国である。典型的な多民族、多言語国家で、宗教もヒンズー教、チベット仏教、アニミズムなどその習合が混在している。主な産業は農業で就業人口80%が従事し、米や小麦、トウモロコシ、ジャガイモなど食用作物を栽培している。他には、ヒマラヤ関係観光業などである。他に、表に出ないがインド人富豪相手のカジノ収入が観光業を凌ぐと耳にしたことがある。食文化はインド料理、中華料理とチベット料理が融合したものが多く、味はインド料理に似ているものが多い。

＜不思議のカトマンズ＞

インド半島の北方に横たわるヒマラヤ山脈、そのヒマラヤの山々に抱かれ、標高 1,300m のカトマンズ盆地がある。ここにカトマンズをはじめパタンやバドガオンの古都、幾つもの町や村が点在している。カトマンズは一国の首都にしては小さな印象を受けるが、ネパール最大の都市である。レンガ造りの街並みは中世の世界に迷い込んだような印象を受けるし、至る所で寺院や仏塔に出会う。街は人、車、自転車、バイク、小型オート三輪のテンプー、それに牛と犬で溢れており埃っぽい。車はほとんどが不整備で黒煙を吐き、喘ぎながら走っている。ひっきりなしにクラクションが鳴り、足元には野良犬が横たわっている。道路両側の店は壁いっぱい商品に吊るし、道まではみ出している。その一方で、路上の物売りは鞆一つ分位の品揃えで商売をしている。

こんなカトマンズだが、何か懐かしさすら感じられるから不思議である。何の抵抗もなく溶け込めて心が落ち着く。その理由の一つが社会生活の決まりごと、しきたりが押し付けられたものではなく、人々によって自然淘汰され必要最小限のものだけが残っていることからくる人間臭ささだろう。もう一つが人間と神が共存し、現代と中世が融合していることが住む人々の表情を穏やかにし、時間に追われることのないおおらかさだろう。

ヒマラヤ山脈

ヒマラヤ山脈は、インド亜大陸とチベット高原を隔てている巨大な山脈である。西はパキスタン北部やインダス川流域から、東はヒマラヤ山脈北部の水を集めて流れてきたブラマプトラ川の大屈曲部までおよそ 2,400 km、南北の幅は 200～300 km に及ぶ。

世界最高峰エヴェレストを中心に、東にはナムチャバルワ、西端にはナンガバルバットが鎮座し、その高度故に「第三の極地」ともれている。ブータン、中国、インド、ネパール、パキスタンの5か国にまたがり、インダス川、ガンジス川、ブラマプトラ川、長江などアジアの大河の水源になっている。



パンジャブ ヒマラヤ インダス川源流の水河

一般的には、東からアッサム ヒマラヤ（インド）、ブータン ヒマラヤ（ブータン）、シッキム マラヤ（インド）、ネパール ヒマラヤ（ネパール）、ガルワール ヒマラヤ（インド）、パンジャブ ヒマラヤ（インド）の6地域に区分される。なお、これらの国名は南麓のもので、北麓は全て中国チベット自治区に属する。なお、ヒマラヤはサンスクリット語「雪の住まい」の意味。

＜ネパール ヒマラヤ行＞

チベット難民が経営するゲストハウスで紹介してもらったガイドとネパール ヒマラヤのトレッキングを楽しんだ後、業者を介してカトマンズから陸路でヒマラヤ越えラサ行きのツアーを申し込んだ。保険会社勤務のオランダ人2名、イタリア人学生と日本人の4名で、ガイド付きランドクルーザーを借り切った。カトマンズからラサまで車で4泊5日。ネパール ヒマラヤ山脈を横断するので5,000m級の峠を4つ越える。

最初の宿泊地二エラムを散策している時、集落の端で夕食の準備をする遊牧民に会した。「どこから来た?」、「日本まで歩いて何日かかる?」。ちょっと塩味のするバター茶をいただきながら言葉の壁を越えて話し合った。

車が黒煙を吐きながら辿り着いた 5,030m のラルン ラ（峠）は荒漠としていた。石塊が一面に



転がり、所々に無造作に寄せ集められた石塚があり、色あせたタルチョ、祈禱旗が吹き抜ける風になびいていた。荒野の彼方に巨大な水晶の塊のようなシジャパンマ（8,013m）が、チベッタンプルの空の下に鎮座していた。

19～20 世紀のチベットは、清朝とチベット進出を図るイギリス、帝政ロシアの角逐の舞台だった。標高 4,040m のギャンツェの街を見下ろす城砦、ギャンツェ ゾンは、イギリス軍との戦いで陥落した。ここを足場にラサに入城したイギリスは、チベットにおける優位を確立していく。戦いに敗れ打ち棄てられた象徴は哀れさを漂わせて山頂に建っていた。



＜パンジャブ ヒマラヤ行＞

50 年前の晩秋、来夏のヒマラヤ行を模索している時、政治的な理由から入域制限が厳しかったパンジャブ ヒマラヤ、ザスカール地方が開放された。この機会を逃す手はなくネパール ヒマラヤから急遽変更した。ところが、交通不便に加え、「いくつかのルートや2、3の峰を除いてはチャンドラ川（チェナブ川上流）上流とザスカールとの間の地域は事実上空白のままである」とヒマラヤ研究者の第一人者、ケニス メイスンに言わしめた地域である。集められる資料は戦前のわずかなものと、それを頼り作られた地図だけであった。そんな折、日本山岳会で活躍していた県立鶴岡南高山岳部卒の早坂敬二郎が、アメリカで発刊された人工衛星からの写真をもとにした地図を見つけてくれた。地図はぎっしりと情報のつまった宝物に思えて、「これで何とかなる！」と妙な自信が湧いてきたのを思い出す。

山仲間5名で現地に足を踏み入れてみると、州政府警察所からポーターや馬雇用紹介状や食料購入協力依頼状などの申請、ザスカル地方では予定していた食料が手に入らずなどなど苦労の連続だった。幸いシェルパのダラムチャンとワンゲルの2人に恵まれ予定したコース、ザスカルのウマシラ（峠）でヒマラヤを横断し、ラダック経由でスリナガルに出ることができた。戦後、初の踏査行で40日間の長旅だった。



ヌン峰（7135m）

<シッキム ヒマラヤ行>

シッキムは、古くからインドとチベット交易のメインルートであり、1975年までの約300年間、シッキム王国として栄えた。もともとはチベット語系レプチャ族が住んでおり、17世紀にチベット人（ブディア人）が建立した王国であった。19世紀になるとイギリスの保護国となり、茶エステートの労働者として大量のネパール人を移住させた結果、全人口の75%以上を占めるようになってしまった。その結果、チベット系の王政の基盤が弱体化し、民主化の要求するデモ隊に王宮警備隊が発砲したことから騒乱状態に陥った。中国の介入を恐れたインド政府は軍を派遣し、1975年、王政廃止と同時にインドの州として編入された経緯をもつ。

シッキムはインドでありながらインドでない不思議なところに加え、これらの複雑な事情から入域制限が厳しく、外部からの受ける影響も少なくネパールとチベット文化を持ち合わせた独自の生活スタイルを残し、ヒマラヤの山々を望める桃源郷と称されてきた。シッキムの州都、ガントクから昔チベットとの交易の拠点として賑わったというラチュンを目指した。ラ



チュンの標高は2,600m。庭から氷と岩のヒマラヤの山々が望まれた。ここを訪れる人々の目的はただ一つ、ユムタン谷を遡った4,800mの「天空の地」ユメサムドン、通称ゼロポイントである。山崩れによる岩塊流の中を大きな岩の塊を避けて通ったかと思うと路肩の崩れた九十九折の坂道が続く。温泉の湧くユムタン谷は標高3,485mで空気がひんやりとしていた。5月下旬には幻の花、ブルーポピーが咲き乱れ、幻想的な花園が現れるという。森林限界を超えると巨大な丸坊主のような草塚が目立ってきた。4,000m近くに軍の基地があった。顔に煤を塗った兵士もちろほら見える。塹壕、迷彩色のネットで覆われた車が見える。

セピア色の草と苔の世界は、傾斜が緩くなり峠を意識させる光景に変わった。木棒を立てビニールで覆っただけの粗末な茶店が10棟。岩塊で行く手を阻まれた20数台の車、人々が散らばっているところが4,800mのユメサムドンだった。時折雪が舞った。石から石へ飛び跳ねていた時だっ

た。頭がクラッとした。改めてここの高度を認識した。ゼロポイントのモニュメントは無残にも



第3の高峰 8586mのカンチェンジュンガの夜明け

崩壊して唯の石塊と化していた。車道はこの先さらに伸びており、遥か彼方の山腹を過ぎているのが見えるが通る車はない。ここは国境紛争地ある。シッキムとチベットとの国境での衝突が起きてから北シッキム地域は面倒になった。インド入国のビザ、シッキム州入域許可証に加えて「北シッキム入域許可証」を取得しなければならなかった。

<アッサム ヒマラヤ行>

ヤルツアンポ川はヒマラヤ山脈の北麓を1,500kmも悠々と東に流れ、山脈の東端で180度流路を変える。切り立つ山々から河床まで数kmともいわれる世界1の峡谷が西に進路を変える。ここを大屈曲点、中国語では大峡谷と呼んでいる。今日では航空写真や衛星からの画像で解っているが、50年ほど前、地元の人たちが180度流路を変えることが信じ難く、ヒマラヤの謎の川とされていた。峡谷の行き先を確かめるため複数の丸太を流したが、木っ端微塵に砕け散って丸太の確認ができなかったことが更に謎を呼んだという。



大屈曲点（絵葉書からコピー）

大河は、その後中国とインドの国境、マクマホンラインを越えて、ヒマラヤ山脈を迂回してインドに入り、プラマプトラ川となってバングラデッシュでベンガル湾に注いでいる。

この大屈曲点に杭のように突き刺さっているのが、1992年まで未踏峰の最高峰であったナムチャバルワ(7,782m)^(*)である。今回、セチラ(峠)から快晴の下で望むことができた。1992/10、第2次日本山岳会と中国合同隊が白無垢の頂を踏むが、その蔭に東京農業大学山岳部の監督を務め

た鶴岡市羽黒町手向出身の早坂敬二郎氏が大きく関わっている。彼は登山許可取得に奔走し、1990年の偵察隊副隊長として参加、中国隊員とコミュニケーションづくり、そして6,900mまでの試登で頂へのルートを切り開いた。残念ながら登頂7ヶ月前、北アルプスで雪崩に遭い帰らぬ人となり、登山隊に加わることはなかった。

(*) ナムチャバルワは、チベット語で「天空を突き刺す長針」の意味



アッサム ヒマラヤ ナムチャバルワ